

# 特別支援学級における対話的教育の検討

—ヴィゴツキーの障害学理論から—

○荒巻恵子

八代史子

(東京大学大学院教育学研究科) (武蔵野市立境南小学校)

KEY WORDS: 特別支援学級 対話的教育 ヴィゴツキー

## (目的)

本研究は特別支援学級での「対話的教育」を検討することを目的し、児童と教師の間の対話について、ヴィゴツキーの障害発達論(2006)から検討を行う。ここでは、以下の3つの理論について対話との関連を検討する。第一は、高次な精神機能は精神間的機能とする集団的形態と、精神内的機能とする個人的形態を発生之源として、二度発生させることとの関連、第二は、行動様式において、子どもの集団的行動から、周りの人々や子どもとの協同へ、さらに子どもの社会的経験や適応といった、知的活動の高次機能を発生させることとの関連、第三は、ことばの発達過程において、集団的形態から、個人的形態への移行の間での自己中心のことばの出現を生起させることとの関連を検討する。

## (倫理的配慮)

研究趣旨と内容において、事前に保護者、学校管理職、学級担任への説明を行い、承認を得て行った。研究および発表における記録の用途への承諾、仮名による個人情報への配慮など、倫理的配慮を行っている。本稿においては、学校名・学級名・児童名は全て、仮名を使用する。

## (方法)

### 1 対象

関東圏にあるさくら市立かえで小学校に設置される特別支援学級「これのき学級」(知的障害学級、発達段階別クラス編成、男児20名、女児5名の計25名)を対象とする。教員は50代1名、40代1名、30代2名、20代1名の5名、介助員10名が1日5名体制で指導を行なっている。

### 2 方法

調査は200X年4月期から200X年12月期にかけて週1～2日の頻度で、参与観察を行う。観察日のべ26日。観察者記録、録画ビデオ、ICレコーダーによる録音記録を用いて、逐語録・エピソード記述をまとめ、質的研究を行う。

## (結果と考察)

### 1 補償の原理の基づく対話

#### ・いずみさんの事例(1)

多動性のいずみさんが全体朝礼で指導を受けているエピソードでは、多動性のある子どもへの指導を、行動抑制ではなく、ヴィゴツキーの「補償の補償」に基づいた「自己の機能障害を自覚すること」や「自分自身が劣等感を抱くこと」から検討した。知的障害児ゆえにそれを、自覚することが出来ないという、両義性もある。ここでは、教師がいずみさんに、障害を自覚させたり、劣等感を体験させたりする対話によって、ヴィゴツキーの、「補償の原理」でもある、子ども自身が、機能障害を自覚したり、劣等感を抱くことで、次の高い水準への欲求を現わすとされる、いずみさんの行動変容が見られ、対話の効果が示された。

### 2 自己中心のことばの出現を拾い上げる対話

#### ・いずみさんの事例(2)

学級での話し合いのエピソードでは、協同の集団的行動として、学級でのきまりを守れなかったことが抽出され、そこでの教師との対話によって振り返る様子がみてとれた(精神間的機能)。さらに、学級のきまりを守るためにどうしたらいいか、考えていく様子が見てとれた(精神内的機能)。そして、その精神間的機能と精神内的機能の移行の間に、いずみさんの自己中心のことばの出現があった。教師は、いずみさんの高次精神機能の発達過程の二つの行動形態の間に出現した自己中心のことば「むずかしいな。」の出現を拾い上げる対話によって、いずみさんは個人的行動形態に移行させるという行動様式への変容がみられた。

### 3 行動様式の変容を起こす沈黙の対話

#### ・言い争いの事例

げんきさんといずみさんの言い争いのエピソードは、「黒板を順番で消す」という学級のきまりに対する二人の意見の食い違いから起きた。ここでは、二人の行動様式の変容をヴィゴツキーの言説(2006, p172, 18-p173,4)である4つの集団的行動様式から検討した。

#### I 自分の行動を制御し、直接的衝動的行為を正誤する

II 一定のルールに自分の行動を従わせ、行動を課題に応じて方向づけようとする志向

#### III 発生する別の行為に変える

#### IV 自己の行為を仲間の活動と調和させる

二人の言い争いは、IからIIIまでの行動様式に現われていたが、IVへの移行がなかなかできなかった。教師の沈黙が二人の行動様式(IVへの移行)を表出させた。

### 4 二次的症候を征圧する対話

#### ・ひできさんの事例(1)

ヴィゴツキーの可塑的、力動的徴候コンプレックスの言説は、ある徴候が変容している様態を示す。ひできさんの観察記録から、ひできさんの障害の一次的症候、二次的症候を検討した。さらに、学級転入当時と比較し、症状の変容を抽出した。一つは、自閉症児の行動の征圧されたことがわかった。さらに、怒りや叩く行為の代わりに、言葉による表出が現われた。「対話」による第二次症候の征圧の可能性が示唆された。

### 5 精神間的機能から精神内的機能への変容を促す対話

#### ・ひできさんの事例(2)

ひできさんは、歯磨きしたらシールを貼るきまりを守るという集団的行動を、十分認識していたにもかかわらず、守れなかった。協同での集団的行動から、個人的行動の高次精神機能への移行について、ひできさんの行動様式と教師との対話によって、精神間的機能から精神内的機能に変容していることが明らかになった。

## (文献)

ヴィゴツキー『ヴィゴツキー障害児発達・教育論集』柴田義松・宮坂瑠子訳、2006、新読書社。  
(ARAMAKI Keiko, YATSUSHIRO Fumiko)